

第  
11  
号

ア  
ク  
ト  
ス

文  
芸  
集  
団  
A  
c  
t  
o  
s

平  
成  
二  
十  
三  
年  
八  
月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによって、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験の必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

忘れ難きスケルトネマの思い出：伊藤雪山	1
寄稿 撫子だより：吉田瑞代	6
運命：小川悦子	9
詩2編 サンダーバード・梅雨：大西隆史	17
乾杯：彩 華	20
自句自解：彩 華	21
ちよつと雨宿り：高阪博一	23
短歌八首：小野村新	31
こどもトイレ異聞：大西玄一郎	32
配句：大西玄一郎	39
生きる音：令月	40
― 競演 第8回 てんー	
テンに帰れぬかぐや姫：高阪博一	43
転：永井組若芽	50
「金閣寺」：柴小路秀麿	53
編集室から	60

残しておきたい私の卒業論文のこと 2011.2記

―忘れ難きスケルトネマの思い出―

伊藤雪山

一般に大学の卒業論文づくりなどというものは、あまり楽しいものではないようだ。むしろ、苦痛をとまなうものとの相場がある。自分で課題を設定して、或る期間まとまった研究をして、その成果を書き記し、締め切り期限内に提出することは、なかなか容易なことではない。私は先輩の卒業論文の清書を引き受けたことがあった。あわてていた彼はぎりぎり間に合った。

一般には、たまに随筆の中に卒論を思い出話として、取り上げているのを見ることがあるが、それも、部分的挿入として垣間見るぐらいで、まとまって卒論の苦労話など、おおよそ、お目にかかったことがない。

私の場合のそれは極めて愉快的研究であった。今、思い出しても爽やかな春風にふかれているような限りなく清々しい快い思い出が大部分である。そこで、以前からどうしても、そのことを書き残しておきたいと思っていた。勿論、今、ここでその研究の内容、成果をこ細かく書こうなど思ってもいない。卒業論文に纏わるその周辺の面白かったお話を書き残しておきたいと思っただけである。

普通は単独で取り組む卒業論文であるが、偶然にも私の場合は五人組のプロジェクトチームの協働研究だった。

私は教育学部の理科研究室に所属していたのだが、いよいよ三回生になると専門分野に入ると同時に卒業研究論文の方向性を絞っていくことになる。そんな時に先輩から研究を引き継いで欲しいとの打診があり、当時親しくしていた友だち五人と共に誘われて文理学部分析化学研究室に入

ることになった。そこには酒井教授と云う先生がいて、日本で初めて、テレビの研究に取り組んだという話を先輩学生から口つたえに聞いて、かなり名が知れていた。後に研究室に入ってから直接、教授自身の口からその話をよく聴かされたものだった。やさしいが、少し変わった先生だった。

昭和三十七年頃の話である。当時、火力発電をしている東電は、発電機を初めもろもろの機械を冷却する必要があった。そのためには、東京湾から海水を鉄管隧道を通して引き込むのであるが、問題なのはその海水の通る鉄管の内側にフジツボがつく。これがやつかいなのである。つまり、海水の通りを悪くする船体の底に付着するあの貝と同じものだ。

以前から薬品処理が行われてきた。硫酸銅液でフジツボの幼生発生段階で死滅させるのだが、後になると公害問題が取りざたされてきた。東京湾を汚染し、さまざま魚介類に被害をもたらした。それは公害のもとになっていた。

そこでこのフジツボを除去するのに人力で行うことになるのだが、当時の金で、数百万円の費用がか

かるという。何とかそのコストをさげようと云うことで、依頼されたものであったのである。

当時、大学は産学協同研究の一端を担っていて、分析化学研究室は東京電力からこの問題の研究を依頼され、云わば委託事業の一環として、わずかな費用を頂き請け負ったものだった。そのプロジェクトチームを組み、その研究の一端をつかさどることとなっていたのである。

その研究室で与えられた大きいテーマは「隧道管に付着するフジツボの生態とその除去」、簡単に言えば、如何にしたらフジツボの着生を防ぐことができるかであった。

分析化学研究室ではフジツボを水槽で飼育していたのであるが、その餌としてプランクトンの一種のスケレトネマが必要であったのである。それは車エビの養殖に餌として使われていた。

そのため、私達は仲間と共に、遠く汽車で三時間もかけて山口市の水産試験場まで出かけた。そしてスケレトネマの種を五本の試験管に入れ、死滅しないよう遮光して大切に持ち帰った。

研究は「スケレトネマの培養と環境条件の研究」である。研究は面白くなければならぬ。ひたすら、毎日毎日、スケレトネマの培養と実験の毎日であった。溶存酸素量、有機物量、水温の変化、培養液の精製さらに、増殖の変化量を分担した。顕微鏡の下で個体数を数える根気のいる作業である。油断すると度々実験途中に、数個のフラスコ中のスケレトネマが一度に死滅することがあった。過増殖によるフラスコの中の酸素不足が原因だった。これに似た現象が自然界でも起こる。海の赤潮現象である。条件を整えば、一時異常に増殖をして後は、全滅がまっている。赤潮はプランクトンの死骸である。

開高健著の「パニック」という本にねずみの反乱というのがある。普通、花の咲かない竹や笹であるが、ある年いつせいに花が咲き、実がなった。その年には不吉なことが起こるといふ。食べ物が増えたため野鼠が、過増殖ならぬ過剰に繁殖した。その翌年は食べ物不足する。そこで、野鼠の大群は村にあふれ出てなりふり構わず農家を襲う。野良仕事

に出かけた留守をめぐけて、寝かせていた赤子さえ襲う。そして、それでも生き延びるためにパニックになった彼らは、先頭をきつたねずみの後を追って、つぎからつぎと海中にとびこんで死んでいく話である。動物は、ある条件を整えば、普通と違ってその一時に異常に増えて、その後は、運命共同体となつて、悲惨な運命を辿ることになる。これは生物生態系の必然である。

来る日も、来る日も、リアカーにビンの容器を載せて海水を松江から恵友（えとも）海岸まで三時間もかけて採りに行き、その海岸でひとしきりあそんでから、また、同じ道を帰る。夏休みでもある。それがなんとも楽しいのである。いつも五人は一緒だった。いつも少年のように純な気持ちになつて周りの自然と戯れ遊んだ。それが今、記憶として心の奥深く残っている。

分析化学の他のグループは、フジツボの繁殖を阻止する研究である。フジツボが産卵し幼生が発生したところで、高周波電流を流して、死滅においやるといふ研究であった。

その間を縫って、研究室の二十数人の先輩を合わせた仲間は大びたびお寺に合宿しては親睦を深めた。

地学野外実習では松江郊外の丘陵地を一日かけて歩き回り、地層の露頭を探し、化石などを掘り起こした。

さらに白浜の京都大学臨海実験所で二週間宿泊しての生物野外実習ではウニの発生、臨海周辺の動植物採集など宿泊しての研究はとても愉快な思い出であった。

ある晩、夜中に浜辺にでて遊んでいるとき産卵中の海亀に出遭った。その海亀を捉えて、竹棒に口でくくりつけてかついで持ち帰り、臨海実験所のプール水槽に放したこと、テントをついで紀伊半島を一周したことなど忘れ難い思い出である。

その五人は卒業後は安来の宇名ちゃん、松江の修ちゃん、津山の秋ちゃん、総社の勤ちゃん、明石の私と就職先はばらばらになったが、ときに津山居

住の秋ちゃんの計らいで、津山の鶴山公園の桜見物に夫婦同伴で集まって懐かしい思い出話で一夜を明かした。それ以前に一人宇名ちゃんはすでに他界してしまっていた。

「思い出」という言葉を聴くとき、過去のこと、後ろ向き、女々しいなどと考えた時期があった。しかし、ある時、あることをきっかけにその考え方は間違いだと思いはじめた。よい思い出をつくることは善く生きることなのだ。よい思い出をつくらうと工夫する。以来、私は、子どもたちによき思い出をつくるように努力し、力の限りを尽くせというように言うて来た。

「よき思い出を沢山つくれ」それが「善く生きること」に繋がるのだ。若き頃に善き思い出を沢山つくることはとても大切なことである。振り返ったときにそのよき思い出を糧にまた前進する力が湧き上がる。それは人生をより豊にするからである。これからの人生をおくる若き人たちに言いたいのである。



今、私は、文化連盟で理事長の仕事をしている。その中、ある人と話をしていたら、たまたま偶然にもフジツボの話になった。当人は造船所にかつて勤務していて、リタイヤした人であるが、現在大型船舶のジーゼルエンジンの販売を手がけているらしい。船舶の底にフジツボが付着する。その対策についての話で盛り上がった。特殊な塗料の研究も進んでいるらしい。

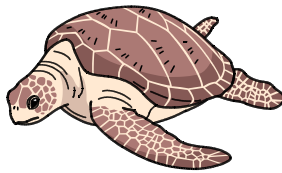
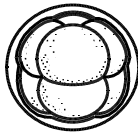
そしてそこでも高周波電流をかけて、死滅させるかつての私達の研究と繋がっていることを知ったのである。本当のところは現場ではどうなのか、もう少しそのところを深く知りたいと思った。久しく忘れかけていた遠い昔の大学時代のスケルトネマの思い出を懐かしく思い起こすことになったのであった。

おわりに一言。楽しい思い出ばかりではない。反対に人にはそれぞれおぞましい、思い出したくもないことも沢山あるのだがそれは封印しておきたい部分である。それは、ちょうど戦場にでかけた兵士が人道にあるまじき状況を体験した中で口を閉

じて語らずと似ている。自分の心の中のとらうま、タブーなのだからだ。

私はこれからも自身の「よき思い出」のオンパレードを書き起こしてみたいと思ったのである。それは記憶に残る自分史でもある。

おわり



## 寄稿

撫子だより

吉田瑞代

多分、芽が出るだろう。小さな植木鉢に、すでに翁草が植わっているトロ箱の隙間に、クリスマスローズのプランターに、と三通りに淡路から送られてきた貴重な河原撫子の種を蒔く。まだその上に何分の一かを残し……。これはこの事態が生じた発端の主Sさんに届けるつもりである。

話は十数年前に遡る。わが町の国文学者、中嶋信太郎先生がご健在のころ「万葉の森」活動のボランティアに加わっていた私は、Sさんに誘われて、数人の仲間と国岡地区の満溜池の堤に登った。

頃は八月だったと思う。池面をわたる風が心地よく、十から三十センチの雑草と、ミソハギなどに

混じって、薄いピンクの河原撫子がそこに優しく、控えめにしかも遅しく細やかな花弁を風に靡かせていた。

「ここにも！」「あそこにも！」

感動のあまり、私たちは夢中で土手の上を歩き回った。河原撫子は万葉集にもたくさん詠まれている大切な野生種なのだ。

その後稲美町はため池の多い町として脚光を浴び始めた。町としてもこれを更にアピールしようと、国指定の申請をするや、ミュウジアムなどの活動が盛んになり、静かに眠っていた自然いっぱい池池が、護岸工事やウォーキングロード設置などで騒然となった。「なんか不自然やなあ」とぼやくのは、あくまで昔風ため池に拘わる少数にしかず。

ある時、自然愛好家の友人を自信たつぷりに満

溜池に案内した。なんのことか、すっかり様変わりした満溜池の堤防の上部は、赤いアスファルトがべつたりと塗り固められ、草が生える余地もない。あのかわいい撫子たちはどうなつてしまったのだろう。せめて土手の傾斜部に移してくれてはいないかと、辺りを探したが虚しい結果だけが心に深く残つた。万葉の森を創設された中嶋先生も亡くなられてしまった。

また数年がたち、兵庫県高齡者放送大学に学ぶ中、テキストの「歳時記」欄に松田和薫先生の撫子の記事を読んだ私は、あのときの口惜しさを思い出し、思わず投稿したのである。すると、五ヶ月後のテキストに掲載され、この四月、酷い風邪に悩まされて落ち込んでいる私のもとに、一通の美しい文字の手紙が舞い込んだのだ。

これぞ淡路市の〇さんからの、懇切丁寧な文面と、彼女が淡路の野に採集して育てられている、河原撫子の種のはいつた小袋だった。「もし生えなけ

れば、五月の文芸祭に参加するので、自分の苗を持参する」との添え書きまでついて……。

ちかごろは、どつぶりと感動に浸ることなどめつたにない。初孫ができたこととはまるで異質のこの感激を、私は誰かに話さずにはおれないのである。もちろん芽が出た暁には、Sさんを誘つて満溜池へ移植に行くつもりだ。

結局、種は芽生えずじまい。淡路からまたもや苗をいただいて、まずは増やすこととなつた。

※いなみペンの会



※吉田瑞代様経歴

昭和15年加東市生まれ・小学4年から加西市へ転居・結婚後稲美町在住・本職農業、副職吉田瑞室いけばな教室

・文芸・関係

昭和58年万葉サークルに入会これが茅花短歌会となる・同時に印南野半どんの会数年後県の半どんの会に入会・平成11年より子午線発行委員・平成16年いなみペンの会発足責任者となる・平成17年新風社より「おんどりオンと裏庭の鶏たち」出版・平成18年度半どん文化賞及川賞受賞・平成19年NHK木村治美エッセー教室、エッセー友の会所属

・趣味関係

七十年の間に夢中になったこといけばな写真琴三弦山歩きマラソン野菜花づくり読書コーラス管楽器（フルート）手作り味噌ドライブなど今は出来ないことが多い。

◆「いなみペンの会」の吉田瑞代様から原稿を頂いた。

編集者（大西）は「子午線」の企画編集顧問をしてい

る。「子午線」というのは東播磨文化団体連合会の文芸誌で、第34号から正式には「東はりま文化子午線」という名称になった。「子午線」の発行委員という方々が、北・東播磨地域の明石市・加古川市・西脇市・三木市・高砂市・小野市・加西市・多可町・稲美町・播磨町から20名余出てこられて、これを作り上げていく。この発行委員を吉田瑞代様はされていて、何度かお目にかかり、お話をさせていたこともある。稲美町で文芸グループを主宰されていて「つぐみ」という会誌を年に1度出されている。

今回この文章を頂いた。誌面を借りて御礼申し上げます。

さだめ  
運命

小川悦子

「ねえ、今日何の日か覚えてる？」

「5月31日……」

「結婚記念日よ」

31年、長い年月を共に生きてきた。決して平坦な道のりではなかったが、楽しいこともあり二人の娘にも恵まれた歳月だった。

「今夜はお祝いよ。ごちそう作ったから、さあ座って。乾杯しましょう」

「乾杯」

ワインを交互につき、料理を口にしながらたわいのない話をした。今の洋子にとってこういう時が気持ちが一番落ち着く。ひろしとは気が合う、何でもない会話が楽しかった。

ワインを飲みながら洋子の心の中は、ひろしへの感謝の気持ちでいっぱいになった。若い頃から身体が弱く、いつもひろしに支えてもらっていたことを身にしみて感じていた。そう思うと目に涙が浮かぶ。

ふたりは学生時代に知りあい、まもなく付き合ひ始めて結婚するまでに四年間の交際期間があった。長い歲月の中では別れ話もできたことがあったが、それも乗り越えゴールインできた。結婚の翌年には長女の美智子が生まれた。そして三年後には次女のみどりが。初めての子育ては不安いっぱいだったが、傍らにはひろしがいて心強かった。

「ねえ、あの子たちも大人になったわよね、美智子は小さい頃から身体が弱くて、あなたと二人でよく救急病院に行ったもんだわ」

「そうだったな。みどりはみどりで、中学校の時に学校には行かないと言つて手こずらせた。あの時はホントまいったな。どうなることかと思つたよ」

「あなたの努力のおかげで又行き始めた時は涙がでたわ。そう考えるといろいろあつたわね。」

「もう一度乾杯するか」

「乾杯！ふふふ」

食事も終わり、ひろしはソファーに座つて新聞を広げた。

「珈琲入れるわね」

「ああ」

珈琲を口にした時、玄関のチャイムがなつた。

「誰かしら、今どき」

出てみると久しぶりに、美智子と孫のりーくとみどりが立つていた。

「おめでどう、今日は結婚記念日でしょ。お祝いのお花をおふたりに。それと報告がありまーす。」

みどりが嬉しそうに言つた。

「子供ができたの。来年の春生まれるんだ」

「えつ、そうなの！ お父さん、みどりに子供ができたつて」

「そんなに大きな声をださなくても聞こえてるよ」

ひろしも嬉しそうに笑っている。

「大事になさいよ、つわりはないの？」

「今のとこ大丈夫みたい」

美智子が得意そうに、「わからないことがあれば何でも聞いてよ。子育ての先輩なんだから」と言った。

「よろしく願います。」みどりが笑いながら応えた。

「りーくん、ちよつと見ない間に大きくなつてえ。バーバのとこにおいで、だっこさせて」

「りーくん赤ちゃんじゃないよ。保育園に行つてるんだよ」

「いいじゃない、ちよつとだけ」久しぶりに抱っこするとずしりと重い。「大きくなつたね、ジージもだっこだつて」

りーくんを囲んで楽しい時が流れた。

娘たちも帰り、床につく時、今日は嬉しいことがふたつも重なって、心に残る結婚記念日になったと満たされた気持ちになった。

ほどなく眠りにつきどのくらい時間が経つたのだろう、うめき声らしき声で目が覚めた。隣で寝ているひろしが腰をおさえて苦しんでいる。

「あなたどうしたの！？！しっかりして」

「腰が痛い、痛い」

「救急車——」

あわてているのでダイヤルをまちがえてしまった。

「あなたしっかりしてえ、もうすぐ病院に着くからね」

病院に着くとストレッチャーに乗せられ、診察室へと運ばれた。

「肺炎の疑いがありますね、嘔吐はありましたか」

「いいえ」

「明日もう一度くわしく調べますから診察に来てください」

夜が明けるまで洋子はまんじりともできなかった。胸騒ぎがした。あんなに苦しそうにするなんて単純な病気ではない気がする。

9時の診察開始に間に合うように病院へ行った。

CTを見ながら「やはり肺炎ですね」医師の声が明るく聞こえた。

「そうですね、よかったです。お薬を飲めばよくなりますね」

帰ろうとすると、「あつ、奥さんちよつと」と引きとめられた。不安そうな顔をするひろしに「大丈夫だから」と目配せして椅子に座りなおした。

「気持ち落ち着けて聞いてください。ご主人はすい臓がんの末期です。もつて半年、もう少し早くなる可能性もあります」

医師の声が遠くに聞こえ目まいがした。

「大丈夫ですか？」

「ええ……」

「ご主人には告知しますか」

「黙っておいてください、自宅で看ます。半年生きられるかどうかの人と離れたくありませんから」



「お気持ちは分かりますが、自宅で看るのは大変ですよ。病状がさらに進行したらいつでも入院の手配はできますので来てください」

廊下に出てひろしには、「食事療法を教わっていたのよ、帰りましよ」と言った。

ひろしをベッドに寝かせ、洗面所で思い切り泣いた。医師の声が頭に響く、余命半年。絶対に信じたくない、何かの間違いであつて欲しい。

ひろしの命が危ぶまれているなんて嘘よ、そんなの嘘よ。そんなことあるはずがない。頭を大きくふり泣いた。

少し気を取り直して美智子にすべてを話した。美智子も電話の向こうで泣きながら、おろおろしていた。「どうしてお父さんが！お父さんが！」後は言葉にならない。しばらくして「みどりには絶対に言えない、明日帰るからね、お母さんしつかりしてよ。まいっちゃダメだよ」涙声でそう言った。

翌日約束どおり、りーくんを連れて帰ってきてくれた。何も知らないひろしはその訪問を喜んだ。ベッドの上にりーくんを上げて遊んでいる。その姿を見ると涙があとから、あとから流れてきた。何故もつと早く気がつかなくつたんだらう。今までに腰痛を訴えたことはあつたが、年のせいにしてしまつていたことが悔やまれる。重苦しい気持ち胸いっぱい広がった。

しだいに食欲がおちていくひろしに、少しでも栄養のあるものをと心を配つた。相変わらず腰の痛みがひろしをおそう、時として激痛にうめき声をあげることもあつた。

「俺、何か悪い病気じゃないのか」

「ううん、ただの肺炎つてお医者さまもおつしやつたじゃないの」

もうそんな嘘がつきとおせないほど病状は進行している。胸のむかつき、嘔吐、食欲不振が容赦なくおそ  
う。それがストレスになり、ひろしはイライラすることも多くなつた。美智子と二人、胸がはりさけそうにな  
りながら明日は入院させよう、明日は…、の日々を過ごした。家族もひろしと同様苦しんだ。

いつそあの時告知して、死を受け入れてもらつてるほうがよかつたのではないかと何度も思つた。つらいと  
言う言葉が吐けないほど心に痛手を受けていた。限界だつた。

「お母さん私もう限界よ！ほんとに明日入院させよう。お父さんもそのほうが楽だよ」

「そうね」

そんな二人の心を察するかのようにひろしに、落ち着きがもどつてきた。以前のような症状も遠のいた。  
奇跡だつた。気分のいい日には庭を見たり、りーくんともベッドの上で遊んでいる。たまに笑顔も見え、かす  
かな期待をってしまうほどいい状態が続いた。

「そうだわ、明日美智子もみどりもだんなさまたちも呼んで、みんなで食事しましょうか、あなた」

告知されてから初めて安らかな気持ちになれた。

翌日、がやがやと娘たちはやつてきた。

何も知らないみどりは、「お父さん、この前会つたときより痩せたよ。ちゃんと食べなきゃだめだよ」いつも  
のように陽気に声をかけた。

ひろしを囲んでの夕食会は楽しいものに終わった。

にぎやかに食事をして帰つて行く後ろ姿を、ひろしは寂しげに見送りながら「ありがとう」と言つた。

「少し寝るよ」

「ゆっくりしたほうがいいわ」

夜中、ひろしの布団をかけたおしながらその様子が普通でないことに不安になり、ひろしの肩をゆすつた。洋子の呼びかけに二度と目を開けることはなかった。

「あなたー、あなたー。起きて！起きて！いや、いやよー」

叫びに近い声が部屋中に響きわたり、ひろしの死を確実なものにした。

その顔は苦しみのない安らかな表情だった。

了



詩2編

サンダーバード

小高い丘の公園の

一番奥にぼつんと立つトートেমポール

小さな公園は大冒険に溢れてた

整備された階段を外れ 丘を転げまわり

岩陰に身を隠し 見えぬ敵に襲われ

木に足をかけ 遠くを偵察し

かすかに見えるサンダーバードを目指したのだ

おっかなびつくり触ることが

勇敢であり

ヒーローの条件だった

後ろを振り向けば

まだサンダーバードが見張っている  
どこことなく怖さを感じながら  
乾いた木の感触を握りしめた

久々に触るトーテムポールは  
あのころよりずっと小さくカサカサで  
天から見下ろしていた彼は  
すっかり身近なところに来てしまった

風呂敷をマントにすれば誰もがヒーローで  
スカートをつまんでお辞儀をすれば誰もがお姫様で  
そんな時代を懐かしみ  
整備された歩道をゆつくりと踏みしめた  
サンダーバードはまだそこにいた

## 筋肉が骨になる難病（FOP）



◆筋肉の細胞が骨に変わる「進行性骨化性線維異形成症（FOP）」という難病があります。

明石でも魚住中2年の山本育海君がFOPです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し。ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、更には絵本の英訳や、iphone アプリ化も進行中です。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせはFOP明石事務局

(080・3775・2257)

◆絵本やCDの販売も行われています。詳しくは下記HPでご確認下さい。

◆ <http://www.fop-akashi.jp/>

## 梅雨

湿り気を帯びた風に触れると  
久方ぶりに想い出す

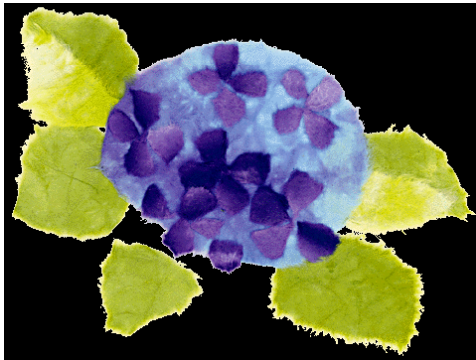
なぜ忘れていたのだろうかと思議になるが  
そんな気持ちも連れ去られる  
不思議な不思議なこの季節

梅雨の雲は異国情緒にあふれている  
遠く遠くそのまた遠く

見たこともない海の潮の香り  
梅雨の雲は異国の香りがする

傘からそつと伸ばす手に  
はじかれ落ちる水滴に

久しぶり 遠くから来たねと思いながら  
梅雨の隙間を歩いていく  
また来年 逢いましょう



大西隆史

「俳句」

乾杯

アクトスの飛躍願つて乾杯を

アクトスの面々照らす花明かり

花の下 熱き想いを語り合う

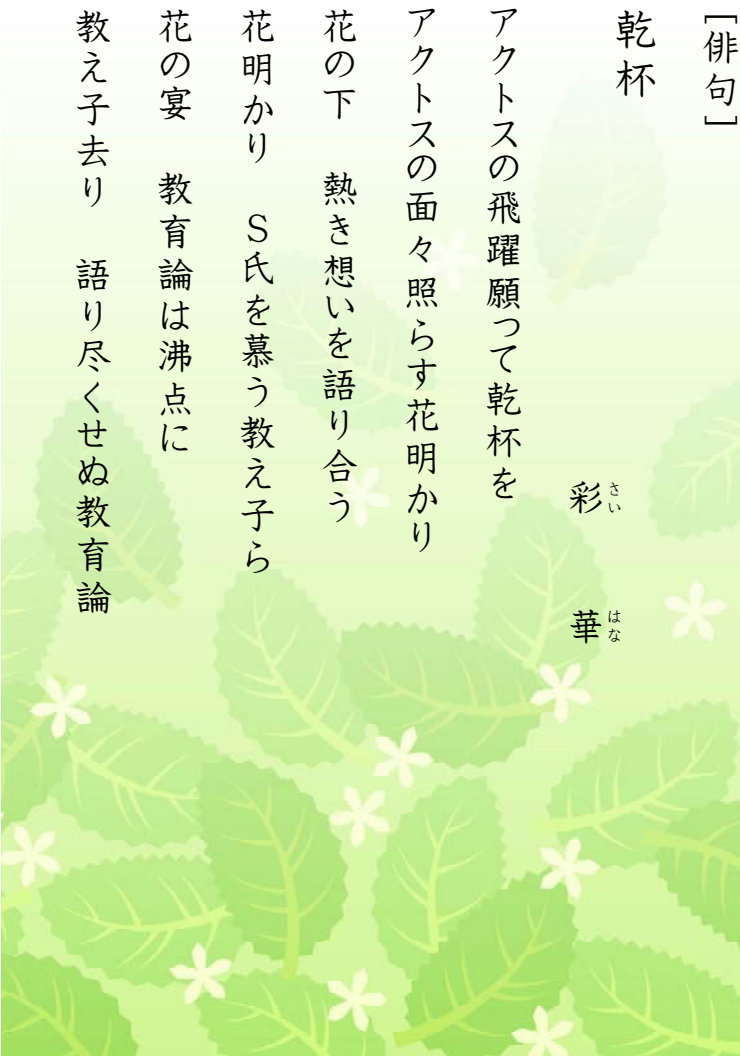
花明かり S氏を慕う教え子ら

花の宴 教育論は沸点に

教え子去り 語り尽くせぬ教育論

彩 さい

華 はな





## 自句自解

彩さい

華はな

吾子連れてプール指導の登校日

昭和五十年代、私が教師になった頃の学校はまだのんびりした時代であった。夏休みの登校は、全校登校日・学年登校日・学級登校日とあった。

しばらくすると全校登校日は無くなり、学年登校日と学級登校日だけになった。学級登校日は、他のクラスと重ならなければプールを独り占めできる唯一の日でもあった。

登校すれば必ず校庭の樹木や花壇の水遣りをし、その後プールに入った。六年生を担任していた私は、大胆にも大プールで子どもたちを自由に泳がせていた。そして小学

校一年生の吾子を小プールで泳がせたり、プールサイドに立って監視したりしていた。今ではとても考えられない光景である。

その後一変して安全面が厳しくなり、プールは単独クラスでは入れなくなった。必ず学年と一緒に、また教師も複数で水中とプールの上からの監視が必要となった。

平成になると、不審者が話題になり、夏休みの登校日は無くなってしまった。



ちよつと雨宿り

高阪博一

忌々しい限りだ。中村さんは空を見上げた。鈍色にびいろの雲が厚く覆っている。今にも降り出しそうだ。出がけには必ず空を見て、傘の用意をするというのに。薄い鉛色の雲に覆われていたが、ちよつと青空も見えていた。ほんの二十分程度で、こんなに変化するとは思わなかった。あの公園の休憩所まで、あともう少し、歩くスピードを速めた。

ウォーキングは中村さんの日課になっていた。六十歳で定年退職して、一年間は家でブラブラしていた。次の年の健康診断で、まるで息子のような若い医師から運動を勧められた。「家で何もしないで、ブラブラばかりしていると、足が縮みますよ、それでいいですか。それに、お腹、破裂しますよ、それでいいんですね。頭に蜘蛛の巣も張りますよ、もうお坊さんトリトリーですよ。歩きませんか、毎日一時間程度？」不真面目なのか、真面目なのか、医師はこのように言ったのだった。

まだ、お坊さんとは付き合いたくなかつた中村さんは、それから歩き出した。家の近辺に遊歩道があり、公園もあつた。一時間程度歩くには打つて付けのウォーキングコースといえた。暑くても、寒くても、いつも午後四時頃から歩くようになった。夏は多少スピードを下げ、冬は多少スピードを上げて、常に薄つすら汗を掻く程度に歩いた。早いもので、もう二年が経っていた。

足を速める。公園の花壇が見えた。ちよつと前まで、色とりどりの堇？ が綺麗に咲いていた。今は、菖蒲？ が薄紫の花をつけている。この薄紫の色が取り分け好きだった。紫は品があつて美しいのだが、ちよつと重たい感じがする。だが、薄くなつていくと、上品さは変わらぬものの、軽快さが出てくる。丁度、カジユア

ルな若いレディーという感じが、中村さんには好ましくてならなかった。

「綺麗な色やのに……。花の名前は？」残念なことに、中村さんは花の姿と名前が一致しない。桜と梅とチューリップ、これだけは完全に分かる。せめて花壇には「花札」を付けて欲しいと思っている。「なんで、『タソガレ大学・アマダクラブ有志』のプレートだけなんやろう。それにしても、こんな名前、よう付けるなあ」と初めてこの公園に来た時、奇妙に思つたものだった。今はもう、見慣れてしまつて、特に気になるものではなくなつてゐる。人間つて、不思議なものだ。

やつと、休憩所に着いた。それを待つていたかのように、雨が降り出した。最初はパラパラという感じであつたが、コンクリートの道に落ちる雨の飛沫が勢いを増して、飛び散るようになってきた。木の長椅子に坐つて、雨を眺めていると、傘を差した人が通り過ぎていく。ツバメがさつとその傘をさけて低く飛び去つていく。一人また一人と、徐々に、腰をかける人も多くなつてきた。

不思議なもので、歩く時間帯がいつも同じという人は多い。家のドアの前で、クラウチングスタート。腰を上げ、手をついて、スタート合図を待つてゐる。ピ・ピ・ピー・ドン、ドアを開けて、一斉に出てくる感じだ。こんなことなので、毎日歩いていると、同じ人によく出会う。挨拶を交わす、暫くすると時候のことを言うようになる。もう、これで『トモ』程度にはなつてゐる。時候の話のついでに、趣味の話なんかをします。ここまでくると、『ダチ』が付くことになつて、熟成はしていないが、一応『友達』が完成する。

トンと中村さんの肩を誰かが軽く叩いた。振り向いた。本田さんだった。「期待してたんやけどなあ、傘ないんやなあ」「本田さんですか。用心深いのに」お互い失望気味に言葉を吐き出した。本田さんは二歳上の六十五歳だ。老人クラブの若手で、楽しそうにいつも先輩連中の世話を焼いている。今日も黒ずくめの服

に、黄色いキャップを被っている。これで、あのメガフォンを持つていれば、典型的な関西人だ。

或る時、後ろ向きに歩いていている人がいた。その歩き方だけでも目立つのに、黒いジャンパーに黒いズボン、黄色いハンチングという出立<sup>いでたち</sup>。呆れて見ていると、「チワワ」その人は声をかけ、ニコニコ笑いながら、振り向いた私の方に顔を向けたまま、通り過ぎていく。この感じの人に知り合いはない。全く見ず知らずの人だ。なのに、小さくなつていく顔と姿を眺めていると、奇妙さと親しみの入り混じった妙な気持ちになつた。次の日も、また次の日も同じようだった。十日もしない内に、話をするようになり、一ヶ月もしない内に友達になつていった。すると、不思議なことに本田さんは、『後ろ向きに歩くこと』をもう止めていた。

「昨日の試合、見た？」「あのツー・アウトで、ボールを外野席に放つた話ですか？ ファンサーピスで、エンジンになつた時、よくボールを席に投げ入れてますよね。」「そやないか。そのサーピスはええねんけど、ツー・アウトでは放れへんやろう。何年野球やつてんねん。野球はスリー・アウト、チャンジやろ。それから、投げ入れるんやろう。こんなことしてるから、今年はおかん。もう見ても勝てそうな気がせん」「そんなら、見んでも、ええやないですか」「見んかつたらなにすんねん？」「本読むとか、音楽聴くとか。奥さんと話するとか。いろいろ……」「はあ」と本田さんは不思議そうに中村さんの顔を見た。

「そんなんしたら、奥さん卒倒するがな」と言いながら、本田さんはまた野球の話に戻つていく。「分かつてないなあ。『あほな児ほど可愛い』つて言うやろ。負けても、負けても、応援する。チヨンボしようが、何しようが応援する。これがファン道<sup>どう</sup>やないか。勝つてるから応援する、これは俄<sup>にわか</sup>ファンや。これはファン邪道や。こんな時こそ応援する、これが真正正銘<sup>まこと</sup>、真のファンや。ちやうか？ そやろ！」この球団の話をする時と熱が入ってくる。自分の言葉に本田さんは酔いだしてきている。そろそろ、別の話題にしようと思つた中村さんはきつかけを

考えていた。まだまだ、雨は止みそうにない。

「それでも、昔のことを思ったら、勝つようになりましたね」「そやねん。十年ほど前までは、万年Bクラスやつたもんなあ、それも最下位争いやつたもんなあ。そやけど、いつも勝つばかりやつたら、おもしろくないで。昨日も勝つた、今日も勝つ、明日も勝つやろ。変化あれへんやん。勝つたり、負けたりするからハラハラドキドキすんねんやん。あんまりし過ぎると、持病の不整脈にええことないねんけど……。まあ、適当に『あほな児』で、適当に『かしこい児』がええねんけどなあ」と本田さんは微笑んだ。何となく『オチがついた』ようなので、村さんは別の話に移った。

「不整脈、大丈夫ですか？」「俺のは、規則正しい不整脈やから」と本田さんは笑顔を作りながら、穏やかな感じで答えた。「俺が入ってる老人クラブも、病気の『総合商社』やねん。あ、このフリーズ、誰かが昔言うてたな」あの女性国会議員と言いかけたが、政治の話はする気分にならなかつたので、中村さんは別の方に話を持っていこうと思った。「フリーズですか。横文字ですよん」「偶には、横文字も使うがな。その昔、仕事で東京に出張した時、カッコいい大手の商社の連中と……」ここまで言うと本田さんはそれ以上口を噤んだ。

本田さんとはもう二年近くなるが、以前どんな仕事をしていたのか、どんな地位にいたのか等々は話したことがなかった。特に、話す機会もなかったし、互いに言おうという気もなかった。過去は過去、重要なのは今、この現在なのだ、と、暗黙のうちに二人は思っていた。昔の友達ではなく、この日、この時に友達でいるのが大事なのだと思っていた。

「先ず、足が痛いやろ、腰が痛いやろ、目が見えんやろ、耳が聞こえんやろ。この程度は軽い方で、心臓がど

うの、肝臓がどうの、胃がどうの、そうなるで一才聞いている方も辛うなつてくるけど」「何十年と使つてれば、痛むところは出てきますよね」「まあ、クラブに来て、そんなことを言いながら、何やかんやしてる人は、オーケーやねんけども」本田さんは多少勢いが衰えだした雨を見ながら静かに呟いた。病氣のことをくどくど聞いても面白くない。何か面白そうな話題はないかと中村さんはまた考え出していた。

「ふと、思つたんですけど、あの看板、何か感じませんか？」と全く今日氣付いたように、中村さんは尋ねた。「どれ」「あれですよん」と指で例の『タソガレ大学・アマダクラブ有志』のプレートを中村さんは指し示した。「ああ、あれか。あそこの学長さんは俺のいる老人クラブの会長さんやねん。俺もあんな名前よう付けると思つて、聞いたことがあるねん」「やつぱり、変ですよね」と、最初は思うねんけど、話聞いていると、何となく納得するねん」「はあ」と中村さんは本田さんの顔を見た。

「せめて、『アケボノ大学』にしたら？ と学長、つまり会長に言うたら、『朝は必ず夜になる。夜は必ず朝になる。アケボノだと将来闇になるけど、タソガレだと将来光が見える』と言うんや。そない言われりや、そんなもんかなあと思つてんけど……。そしたら、『アマダクラブ』はもろ過ぎません？ と次に聞いたたら、『アマダはアマダでも籤くじの方。線を一本いれると直ぐに当たりが変わる。そんな変化に富んだ可能性をシコウしてる』と言うんや」

「この『シコウ』は好みやなくて、『心が向う』という意味なんやそうや」本田さんは中村さんを見て、静かに微笑んだ。「可能性の志向ねえ。その学長さん、いや、会長さん、何となく哲学的ですよん」「そやねん、あの人、定年まで長いこと、鉄鋼商社にいてたんやて。『テツガク』は得意なんやて」「その『テツ』はカネヘンでしょう」「そやなあ」と本田さんが吹き出しそうな顔を中村さんに向けている。そして、笑いをじつと堪えてい

る。「何や、今の全部、冗談ですか」「そやで。よそで言なや」二人は同時にぶつと吹き出した。

向こうの空に切れ目が出来てきた。光が射しそうだ。雨がポツポツという感じになつてきている。そろそろ止むかもしれないと中村さんが思つていると、傘を差しながら、携帯電話をしている人が前を通り過ぎた。「あの人、そんなに急ぐことつてあるんやろうか？　僕らと同じ年代で、ウォーキング中やで。長袖のＴシャツ着て、トレーニングパンツ履いて、ビニール傘差して、得意先には行かんやろ」本田さんが何となく呟いた。近頃、携帯電話をしながらウォーキングしている人を、中村さんはよく見かけるようになっていた。

「行く途中かも知れませんかよ。それもファッション関係の取引先やつたりして：」中村さんは全くありそうも無いことを、ニヤニヤしながら口に出した。「また、冗談言うて。ないない」と本田さんは言い、一息ついてまた喋りだした。「失礼やけど、あのスタイル、典型的な日本人やないか。顔の大きい、胴の長い。それに、決定的なのは」本田さんは中村さんの顔を見て、その視線を上にならずらした。

「その、目線、嫌ですね。ああ、分かりました。最近、我が愛しの奥さんには『経済的や』つて言われてます。育毛剤諦めて。それにしても、本田さんは濃いですね、多いし、黒い。染めてはりますか？　ひよつとして、カ・ツ・ラやつたりして」と言われた本田さんは、やつぱり分かるとばかりに、髪の毛をぐっ握つて引張つた。全く、変化はない。「分かつてますよ」「一応、ただだけ」と本田さんのとぼけた顔を見て、中村さんはぶつと噴出した。

「そしたら、緊急連絡かも知れませんか。奥さんが倒れたとか？　何か：」「倒れた奥さんが、電話してくるか？」「子供さんかも？」「そうかも」と素直に本田さんが肯定した。「俺も、嫁さんから、『持つて』と言われて、持つてんねん。これ」とポケットから携帯電話を取り出した。「えー、持つてはつたんですか！　番号



教えてくれたら、よかつたのに」恨めしそうに中村さんが言うと、本田さんは、電話のふたを開けた。液晶の画面は暗いままだった。

「これ、電池切れ？」「いや、電気は充分あるで。スイッチ付けてないだけ」そんなん、携帯ちやいますやん。いつでも、どこでも、聞けて掛けられるから、携帯ですやん。喋り専門なんて、音しか聞こえんテレビですやん」何を言うねん、りっぱな携帯やんか。掛けたい時にスイッチ入れたら、ちゃんと掛けられるやんか」「そら、勝手つて言うんです」と中村さんが言うと、本田さんは真面目な顔になった。

「昔から電話に追い立てられてたもんね。それに、生活にも、時間にもね。もう、この歳で追い立てられるのはゴメン！ のんびり、気楽に、残る時間を楽しまな。時間は増えへんで、減っていくだけで、特にこの歳になると……。俺つて我が儘なんかなあ、ほんと、些細なことと思うけどなあ」静かな調子で、本田さんは答えた。

もう、携帯電話を掛けていた人の姿は見えなくなっていた。雲の切れ目から薄い青空が見えだしている。雨は降り止んだ。「ほな、また」と本田さんが腰を浮かした。「番号、教えてくださいよ」「ゴメン。分かれへんねん。受けて聞くとダイヤルして掛けるのどしか、知らんねん。掛ける相手も嫁さんだけやし。嫁さんに聞いとくわ」「分かりました。今度、教えてくださいね」と中村さんは歩いて行こうとする本田さんに向つて言った。

「今日、試合ありますかね」「どやろう、雨止んでるし……。帰つてテレビ付けてみよう」「勝ちますかね？」「そんなん、聞くか！ それを愚問というねん。勝つに決まつてるやろ。負ける思つて、見るかいな。勝つてたら、ビール美味いしな」右手でグラスの形を作り、ゴクリと喉を鳴らすように飲む真似を本田さんは楽し

そうにするのだった。

雲がすっかり割れて、澄んだ青空が見える。ピ・ピと小さな鳴き声が聞こえる。どこから来たのか雀が芝生を嘴で突いている。本田さんが歩き出した。徐々に後姿が小さくなっていく。「明日もきつと友達ですよ」中村さんが口の中で呟いた。すると、それが聞こえたかのように、後姿を中村さんに向けたまま、本田さんがゆつくりと手を振っているのが見えた。

了



短歌八首

トツプスビンのボールを高く打ち上げれば森のコートに鳴く春の鳥

浄土寺まで五キロの道を走り来てひとり憩ひてゐる静けさや

瘤を跳ぶスキーヤーの目はまっすぐにゴール目指してカツと開けり

走り去る電車に女一人見え土曜の梅雨空雨降り続く

日本のエーゲ海とふ牛窓は終日雨に降られをりけり

梅雨晴れのポスト映えいる眩しさに夏の匂ひを嗅ぎつつ近づく

人気なきテニスコートの真昼間に今年も夏は巡り来にけり

携帯を切りて男は崩折れぬいとしき人の訃報聞きしか

小野村新

◆ 新入会員

沼田知子さんが、新しく入会されました。今年定年退職されたそうです。「書き出すのはもう少し先になる」と言われています。これからの活躍を期待したいと思います。

こどもトイレ異聞

大西亥一郎

トイレの花子さんという怪談がある。学校のトイレにいる幽霊の話だ。

小中学校のトイレはかほじさように、薄暗く陰気くさい。最近では、照明に工夫したり、男子用も個室を設置するなどして綺麗なトイレも現れている。しかしそれでも大部分は昔のままだ。

尾籠びろうな話で恐れ入るが、第二次大戦後、下水道の整備が進むまで、我が国では大都市といえども、個人の家かみ庭は、かわや「厠」と呼ばれるところがトイレであった。

中国でトイレを意味する「厠」を「かわや」と読むのは、川の上に作られたトイレという意味での「川屋」かわやと、母屋とは別に作られたトイレという意味での「側屋」そばやとする説がある。

東南アジアなどでは現在も川の上の意味そのもののトイレがある。排泄物を魚などに利用させると同時に、水に流す『水洗トイレ』である。

半世紀以前までの日本では、「はばかり」とか「雪隠」せつちん、「手水」ていすず、「ご不浄」ごふじょうなどとも呼ばれていたが、次第

に水洗が普及して、「お手洗い」「化粧室」と言い替えたり、外国語で「トイレ（英語でトイレット (toilet - 化粧室の意)」「W・C (Water Closet)」「ラバトリー (Lavatory) 」と表現も軟らかく、場所も明るく、清潔になった。

トイレに入ると照明が付き、音楽が流れ、便器のふたが自動的に開く。高級なものは、冬、トイレ内の暖房スイッチが入る。そして、あるメーカーのものはアクアコートと言って、少量の水が流れて、汚れをつきにくくする。アクアコートと、一瞬、科学の先端を行くような表現だ。しかし、アクアはラテン語の水である。つまり英語ならウォーターコーティングだ。

次いで男性のために、水面に青い光が照射される。立ったままの小用はそこを狙いなさい、というターゲットである。

さすがに、「ほつといてくれ！」と言いたくなるが、使用し出すと「まあ、ええか」と気持ちに変化するところまでメーカーは読んでいるらしい。

使用中は、ファンが回転して、脱臭している。用が終わると、洗剤入りの水が流れる。もちろん、後は温風乾燥である。

便器のふたはスイッチでも開閉できるが、ほつておいても三分後に閉まる。むろんトイレの電気も消える。快適・清潔なので、家庭にもどんどん取り入れられる。

だが、学校は異世界のままである。

さすがに水洗でないトイレはもう見たことがないが、都市部でも和式がほとんどである。

児童の中には幼稚園や小学校で、初めて和式便器に遭遇して、悩む者がいる。

洋式の方が、座ったり立ったりにも体の負担が少なく、使いやすく、健康にも良いのだが、切り替えは遅々として進まない。

先生から、健康・衛生面を考慮してトイレ改修の主張がでることもない。まさか、膝の屈伸運動をさせるわけでもないだろうが…。

だが、和式の掃除は便利である。

トイレ掃除などしたこともないことで多いので、先生は自ら範を示す。

まず、掃除をする。ゴミやホコリを箒で掃く。尤もこの段階から指導をしなければならぬご時世である。

中学生でも箒をろくに使えない。だから生まれて初めて箒に触れる幼稚園・保育所や小学校は大変だろう。

家庭では電気掃除機である。庭やテラスの掃除に箒がいると思うのだが、マンションなどの場合、箒がない家庭もある。

掃除の次は水を撒いて、デッキブラシでこする。洗剤を撒きトイレブラシで便器を「ゴゴゴシ」。それから再度水で流す。勿論用具は洗って所定位置におさめる。

それからカガミや棚を拭く。しかしここまでする生徒は見たことがない。

箒の使い方以上に、雑巾の洗いや、絞り方を知らない生徒が多い。

家庭でも化学雑巾などを使うから、雑巾をもみ洗ったり、絞ったりすることが少ない。第一、親がこどもにさせない。また幼・小などで、その指導も徹底しない。というより、箒の持ち方などと同じで、家庭生活

で身につくものが、ついていないのである。

それでも箸の持ち方は、鉛筆などと一緒で、学力の向上や脳の形成によいなどと喧伝されるから、親も頑張つて教える。しかし、掃除の仕方は顧みられない。

雑巾を洗う方は、なんとか出来ても、絞るとなると悲惨だ。

雑巾を両手全体を包み込んで、押しつぶすように水気を切る生徒がいる。もちろん充分に絞れるわけがない。

結構多い方法は鉄棒を掴むように、雑巾を上から両手で握り、左右の手を逆方向に動かそうと言う仕事である。まあ、絞れないことはないが……。

「正しい雑巾の絞り方」は、こうだ。

洗ったぞうさんを太いキュウリくらいに丸める、畳む。縦方向にして、右利きの場合、雑巾の下部前方に、右の手の平を上、後方に左の手の平を下に添えて、右左に絞る。

それができない。

また、夏はともかく冬は学校では水しか使えないから、冬場はお湯という家庭とのギャップも大きい。

さて、この拭き掃除の後には、洗剤や予備のトイレットペーパーを補給しておく。

これも気づかない生徒が多い。家庭では手を伸ばせば予備のペーパーがある。

学校では個室はたくさんあるから、あるところを見つければよい。

かくして、暗くて寒くて臭くて汚いトイレが出現する。だから、学校では、小用しかない。後は我慢するという生徒も現れる。

しかも、学校が荒れると、からかいやいじめの場所になり、非行生徒がたむろして、まともに使えなくなる。

トイレで座り込み、タバコを吸い、ラーメンを食べ、ペーパーや扉に火をつけ、あるいはペーパーや、芯の棒を持ち帰ってしまう。

「トイレでものを食べるなんて」というより、それをするのが、非行生の悲しい自己表現・主張なのだ。悪い意味で格好をつけるのである。

一般の生徒は、そこが使えないから、他の校舎に回ったり、上下階に遠征する。時には教師用トイレに逃げ込んで用を足す。

先生は「トイレパトロール」を実施する。

それほどでなくても、生徒に掃除を任せておくと、汚れは蓄積する。

「先生、掃除終わりました」

と係から連絡があり、出掛けるとたいてい水をぶっつけただけだ。

夏など遊んだと見えて、トイレトペーパーまで水浸しである。

ホースは巻かないで、用具入れに投げ込んでいる。

「あかん、やり直せ！」

と言つても、ノタリノタリとして動かない。

掃除の段取りや、やり方を知らない。

そこで「ええか」と、時には個室内に入り込んで、先生が便器を磨く。



教師がこういう風に始めると、手伝うことも出てくる。サボりたい子も、しぶしぶブラシを手にする。だが、たいい教師は複数箇所の監督がある。他の用事が入り、会議やクラブ指導が始まり、大掃除でもない限り付きつきりというわけではない。

掃除終わりという報告を受けるだけでオシマイ、という場合が多い。で、トイレは汚れる。

汚れると使わない、臭くて汚いので掃除をしない。悪循環である。

まあ、徹底して掃除をして、扉のペンキを塗つても、和式であり、家庭に比べて、暗くて、臭くて、冬場は寒いのは変わらない。

小用をしても、後を流すポタンのない便器が多い。

壁の上部にタンクがあつて、そこに水がたまると、一斉に流すと言う方式だからである。

さて、トイレがかように嫌われるのは、排泄物への嫌悪感だけが半世紀の間に根付いたことにもよる。

終戦後暫くまでは、排泄物は大切な肥料であつた。

都市部でも、農民がその処理に訪れて、「お礼に」と大根を置いていくという社会であつた。

田舎に行くと肥だめがあつた。

「天然の香水や」などと悪口を言いつつ、そこで充分に発酵されたものは、野菜などの肥料になつたのだ。

そこに「ドボンとはまつた」という珍事件もしばしば耳にした。

都市部で、排泄物の回収作業を「臭い臭い」と、鼻をつまんでバカにした中学生が、頭からそれをかけられた事件もある。

「おまえも出すんやろが！」

と、怒鳴られたというのだ。些か乱暴であるにしても「臭い」といつた中学生を余り可哀想には思えない。

当時は、循環社会、まさにエコ社会である。

しかし、我々はそれを水に流す、処理に費用をかける存在にしてしまった。

ただ、汚いものにしてしまったのだ。

近年、その見直しも進んでいるという。処理して捨てるのではなくて、活用できるようにしようというのである。

もちろん、排泄行為そのものの場所が快適になるのは素晴らしい。その意味では、学校のトイレは、ほんの少し改善が進みつつあるとはいえ前近代的である。この改修のペースでは二十二世紀になっても「花子さん」がでると思われる。

因みに、排泄行為は、日本では恥ずべき事、隠すべきことだが、中国などでは横に低い仕切りがあるだけで、おしり丸出しである。中世ヨーロッパでは、花の都パリでさえ、二階の窓から排泄物を道路に投げ捨てていたなどと聞く。それがベストの蔓延につながり、下水道の普及に貢献したともいう。

この辺りは価値観の相違である。日本では銭湯があるが、ローマ時代の公衆浴場はともかく、アメリカやヨーロッパでは、恥ずかしいことなのだ。まして中世近代の混浴など、ヨーロッパ人は「オオ！ ノオツ！」と驚いたことであろう。

元に戻ってトイレだが、まあ、私が旅した北京も香港、マカオも、パリなども、少なくとも旅行者が訪れる観光地や都会は、今の日本と変わらない近代的トイレである。但し、有料である。そして暖房温水便座に、

音姫、自動消灯などというのは日本が最先端らしい。

ともあれ、我々が心の根底に、排泄は大切な自然の一部であるという認識を持つこと。こども、生徒たちに持たせること、そしてそれを快適に処理する設備を学校にも早急に取り入れて欲しいと思うのだが…。

了

配句

大西亥一郎

北風やしんという音墜とし来ぬ

冬の海刻を縫い込み風渡る

どんど焼き煙の中に歳一つ

新年会今年は誰が去りゆくか

冬来る団塊世紀終わりたり

母逝きて眺める庭に春萌える

西灘や新酒の香り花一輪



生きる音

無音の空間に響くのは時計の音

何も言わない

何も言えない

言いたいことが何なのか

それすらも分らない

ただ互いに背中から感じる体温が

お気に入り入りの毛布より

ふわふわのぬいぐるみより

ずつとずつと温かくて安心した

令月

その温かさに安心して  
もつと縫りたくて

頭の位置をずらせば

規則的な音が自分の中に流れてくる  
自分と同じ音が伝わってくる

ねえ…音が聴こえるよ

貴方が生きている証の音

それはとても規則的で

それはとても心地よくて

その音に溶かされてしまいたくて

私はゆつくりと目を閉じた



# なにしている？

大西 亥一郎

大学でこのごろ増える**新星人**

授業中 携帯片手に

ツイッター

おもわず笑って 話題人

僕は今日から **嗤い人**

このごろ増える**新星人**



◆近隣地域で、浄土宗のお寺を、お探しの方のお役に立ちたいと思います。

浄土宗 永金山 じょうさん じ 常纂寺

〒651-2133 神戸市西区枝吉4-40

■ TEL : 078-928-6622

■ FAX : 078-928-6858

◆メール [hayato13@yc4.so-net.ne.jp](mailto:hayato13@yc4.so-net.ne.jp)

住 職 佐藤 俊明

副住職 佐藤 明宏

# 一 荒演 第八回 てん一

テンに帰れぬかぐや姫

高阪博一

翁も姫も泣きつかれたのか、かぐや姫の傍らで寝息を立てている。塗籠ぬりごめに隠れてから、どれ程の間が経つたのだろう。絶えず聞こえていた兵士たちのさんざめきも、今はもう聞こえなくなっていた。天高く満月がかがようのは分かっていた。膝に置かれていた翁や姫の手をそつどのけて、かぐや姫は静かに立ち上がった。侍女たちの潜み音も聞こえない。妻戸つまどを開けて、廂ひさしに横たわっている女たちを見ながら、簀子すのこに出て、そこに腰を下ろし、辺りを見回した。

月の明りに照らされて、屋根の上や庭に兵士が

眠っているが見える。翁や姫が帝に警護を頼んだために、数日来この館にいる屈強の者達だ。彼らが眠っている、いや眠らされているのを見て、かぐや姫は天が迎えを差し向けることを確信した。「あの月が真上に来るまで、ここで待ちましよう」かぐや姫の優しげな、それでいて透き通つた声が小さく響いた。

かぐや姫は思い出していた、竹藪で見つけられ、今日のこの時まで、どれ程翁や姫が自分を大切にしてくれたかを。あの時はこうだった、こんなこともあつた、駈け巡る思いにかぐや姫の頬が濡れた。しかし、帰る時が迫っている。もう一度顔を上げて、月を見た。煌々とした満月が、かぐや姫には鏡の

ように思われた、自分の心を映す鏡のように。「目が覚めて、わたくしがいないと分かれば、どれ程翁や姫は嘆くことでしょう」小さな呟きが洩れ出ていた。

いつもなら、花が月の光に照らされて美しく映え、風に細い草が靡き、虫の音が震えるように響いている筈の庭を歩いていることだろう。そこには翁も姫もいることだろう。今は花も草も見えず、虫も鳴こうとはしない。ただ見えるのは、そこかしこに横たわっている兵士の姿だけだ。

十五まで地上に赴くことが天の定めであつた。天の定めは何故はない。定めは定めなのだ。かぐや姫に抗う術もない。竹の中に運ばれて、来合わす人を待った。かぐや姫は祈った、どうか優しい人に巡り合えますようにと。

満月が天空の最も高いところに差し掛かつた。辺りは徐々に暗くなつてきた。兵士の姿がその暗闇に飲み込まれ、全くの闇が覆い、しじまが辺りを

支配した。かぐや姫は怖がらなかつた。これから起こることが分かつていた。再び満月が輝きだした。そして、一条の光がかぐや姫を目がけて駆け下りてきた。満月とかぐや姫が光で結ばれた。かぐや姫は階きざはしを降り庭に出て、静かに天の声を待つていた。天の迎えを待つていた。

どれ程の時が過ぎたのだろう。満月はただ天頂に止まっているだけだ。かぐや姫はこれがどういふことなのか分からなかつた。庭に降りた時、羽衣が舞い落ちてくる筈であつた。袿うちぎを脱いで、それを着る。そうすば、かぐや姫はひとから天人てんにんに戻り、あの故郷に帰れるのだ。静かに、迎えを待つだけのことであつた。だが、羽衣は一向に舞い落ちてくる気配はなく、真上にある満月に照らされているだけであつた。かぐや姫は袿の襟をぐつと握つた。

「どうされたのですか。わたくしはここにおります」かぐや姫が満月に向つて、穏やかに、だが決然とした声をあげた。満月は光を増し、かぐや姫を



一層照らし出した。低いが厚く響く柔らかな声が光の中から聞こえてきた。かぐや姫はその声が地上へ赴くことを命じた声であることに気付いた。「この声は天の声」静かに頭を垂れて、聞き入るしかないことを覺つた。

「よく耐えた。如何に翁や姫が優しいひとであつても、天上のものが地上で暮らすのは大抵のことではない」かぐや姫の心に沁み込むように、この言葉が入つてきた。身じろぎもせず、次の言葉を待つた。「わたしのために、否はないことを、おまえはよく知つていた。この地上に赴く時、何も聞かず何も言わなかつた。従順そのものであつた」かぐや姫に幽かな動揺が走つた。「いつも、従順なだけではないのです。知りたいことはいっぱいあつたのです。教えてもらえぬと分かつてはいても……」頭を垂れたまま、唇だけを動かした。

「そうだろう。知りたいだろう。何故、この地上に赴き、何故、今また羽衣を着ることができないのか

を」かぐや姫は天が全てを見通していることを、改めて知つた。依然として、言葉を発することもなく、かぐや姫は黙っていた。「全ては『ミダ』の頼みなのだ」かぐや姫は即座に理解できなかつた。いつたい『ミダ』とは……かぐや姫は口の中でこの言葉を繰り返しながら、頭を上げて天を見上げた。

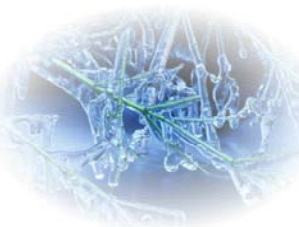
「聡明なおまえに分からぬ筈はなからう。『ミダ』、即ち『阿弥陀如来』のことだ。西方浄土を掌るわたしと同じ天なのだ。この慈悲に溢れた天がわたしに懇願したのだ。『どうか、あの翁と姫に児を授けてやつて欲しい』と。手を広げて、ただ頭を垂れ、慈しみに充ち充ちた姿を見て、どうして断れようか？」天の声がゆつくりと辺りに反響して、かぐや姫に届いた。

もつと先を知りたいとかぐや姫は思つた。何故、ミダさまはそう言われたのか。何故、わたくしが赴くことになつたのか。テンを離れて、どのような人に拾われるか、それがどれ程不安であることか。天は

分からなかったのだろうか。今まで、聞くことを知らなかった、いや、敢えてしなかった。かぐや姫の心にそんな思いがふつふつと湧いてきた。もう、抑えようがなかった。「天人にも、心はあるのです」かぐや姫は固くそう思いながら、天に向つて顔を上げた。

「ミダさまは何故天にお願ひされたのですか」  
「教えてやろう。それはなあ、翁と姫が互いに自らの命を絶つことを止めるためだったのだ」かぐや姫は『命を絶つ』という言葉を反芻しながら、次の言葉をじつと待った。

「姫は児の出来ぬことを恥じていた。そして、竹取の長おさの家がなくなるのを悲しく思っていた。姫は翁おなごにほかの女子おなごに児を生ませよう頼んだ。翁はそれが出来なかった。姫以外に自分の子の子母はないと思っていた。長の家



は潰しても良いと思っていた。姫はその優しさに耐えられなかった。死のうと思つた。そうすれば、翁は諦めて、新しい女子を娶るに違いないと思つた。翁はそれを知つて自分も一緒に死のうと姫の手をとつた。翁には姫のいないこの世など、あろう筈はなかった。『ミダ』はその一部始終を見て、『あの二人を死なさぬ方法はないものなのか?』と思ひ、わたしに児を授けるよう願つたのだ」天の声が一気にかぐや姫の耳に届いた。

自分をただ慈しむだけの翁と姫しか知らなかった。そんな死を賭した葛藤があつたなんて思いもしなかった。あの穏やかな笑顔の影にそんな激しいものが潜んでいるとは思わなかった。かぐや姫はまた天に向つて声を出した。「何故、わたくしだったので、地上に赴くことがどれだけ……」はつとして、かぐや姫はそれ以上の言葉を飲み込んだ。

「『ミダ』の頼みである以上、わたしは天人の内  
で、最も従順で、最も賢明で、最も美しいものを赴

かせようと思つた。それはおまえであつたのだ。おまえの顔を見て、地上に赴くことが不安であることは分かつていた。だが、敢えてわたしは何も言わなかつた。われしのこと間違ひはないのだ、信頼すればそれで良いのだ。あの時おまえが一言でも、抗つておれば、おまえを永劫の奈落に突き落としたであらう。それ以上言つてはならぬ」光が一層かがよやかに思われた。かぐや姫はもう疑念を抱くことを止めよう思つた。ただ、天の声を聞こうと思つた。

「わたしは限りを定めた。ひとには限りがあつて当然なのだ。わたしは当然のことは行う。その当然がひとにとつて、厳しいものであつても、理解できぬことであつても、わたしは行うのだ。わたしは十五と定めた。十五ならば当然、児をなせるものなのだ。だが、おまえは頑なに婿を拒んだ」かぐや姫は言い寄つてきた男たちのことを思つた。無残にも帰らぬものとなつた男のことを思つた。かぐや姫は翁や姫に孫となる子を残したかつた。だが、それ以上に汚

されたくなかつたのだ、あの世界に帰るまで、無垢な世界に帰るまで。

「それ故ではないか、このような悲しいことになるのは。おまえがああ羽衣を着る時、ひととしてのおまえは消え失せる。それはおまえには分かつていたことだ。だが、あとに残るものがあることを、何故分かなかつたのだ？ 何故分かつたのだ？」天の声がかぐや姫に染み入るように響いた。かぐや姫は黙したまま、頭を垂れていた。

「翁と姫は目を覚まし、おまえがいなくなつたことを悲しむであらう。ひとの負う悲しみは時が薄めていく、幽かな痕跡だけを残して。だが、負いきれぬ悲しみもあらう。その時、ひとはなんとするか、おまえには分かる筈だ。ひとの世で暮らしたおまえにはきつと分かる筈だ。まして、翁と姫の<sup>よわい</sup>齢を思えば」かぐや姫にそれが分かつた道理はなかつた。翁や姫のことをひと時たりとも忘れたことはなかつたのに、テンに上ろうとしたこの瞬間、二人のことを忘

れたてしまつたのだ。かぐや姫はそれを恥じた。

「天として、この日まで地上にいることをわたしはおまえに約束した。この約束は守らねばならない。だが、天として、空しくなる筈のものを放つておくわけにはいかない。あの時、『ミダ』の願いを聞き入れた。いまこの時、『ミダ』が何を思っているか自ずと分かる。わたしは命じるだけのものだ、だが、ただ命じるだけのものでもない」天の声がいつももの淡々とした抑揚から、何か湿りを帯びたものに変化しているのを、かぐや姫は感じていた。次の言葉まで多少の間があるのが、かぐや姫には一年、いや十年にも感じられた。「次の言葉を。どうか、早く」心の中で叫んでいた。

「おまえはもう少しこの地上に残れ、翁と姫がこの地上を後にするまで。翁と姫を看取れ。次の世界を言い聞かせよ。『ミダ』がきつと迎えに来ることを言い聞かせよ。次の世界で再び会えることを言い聞かせよ。こうすれば、翁と姫の悲しみはない」この

言葉はかぐや姫の心に沁み込んでいった、汀の砂に水が染み込むように。「その時、わたしはおまえに羽衣を与え、迎えを差し向けよう」見上げるかぐや姫に、これ以上、天の声は聞こえなかった。もう、これ以上聞く必要もかぐや姫にはなかった。

それから、どれ程ここに立っていたのだろう。満月とかぐや姫を結んでいた一条の光は、次第に薄いものに変わっていった。辺りの闇が暗い夜に変わり、かぐや姫は頬を風がそよいでいくのを感じていた。あれ程大きかった月も、真上を過ぎて、小さな鏡のように変化していた。もう少しで、東雲しのめを迎えるのだろう。有明の月が名残惜しそうに、最後の牙えを見せて、淡く滲み出した陽の光に混ざり合つていくことだろう。

かぐや姫は向き直り、階の方に歩いて、それに足をかけ、一段として一段と上り、簀子に立った。振り返つて、兵士たちの横たわっている姿を見た。「目覚めた兵士たちは、帝の威光に恐れをなして、迎え

は来なかったと思うことでしょう。ただ、眠ってしまっただけだ、いつも家でしているようにと思うことでしょうか」天がそのように仕組むであろうことがかぐや姫には分かっていた。廂に横たわる女たちを見て、ようやく翁や姫の眠る塗籠の前に立った。

「眠りから覚めた翁や姫は、わたくしを見つけて、手や頬を触り、わたくしであることを確かめることでしょう。現<sup>うつ</sup>であるとは分かれば、どれ程喜ぶことでしょう。失ったと思つたものが、傍らにいるのです。これが喜ばずにはいられますようか。その顔が浮かんできます。翁や姫の空しくなるその時まで、わたくしは今まで通り尽くそうと思います。今、この時、ここがわたくしの故郷なのですから」かぐや姫は静かに呟きながら、妻戸に手をかけた。

了



転

永井組若芽

運動会で一度だけ、思いつき転んだことがある。中学1年生の運動会のことだ。

クラス対抗だったか、グラウンドを1周したのか半周だったのか？ 詳しいことは覚えていない。

「よいい、ドン」のピストルの合図とともに飛び出した。中学に入學したときには既に身長は一五八センチを超えていたので、運動会の頃には一六〇センチ近くなっていたのではないだろうか。身長の手分足は長く、スレンダーな体はいかにも走れそうなデザインではあった。しかし「なぜ人と競争をして走るのか？」などと思つてたせいなのか、一度も運動会で一等賞を取ったことはない。

でもその時はいつもと状況が違った。「よいい、ドン」から第一コーナーまで一番だったのだ。一瞬、嬉しかった。心のどこかでふわつ、と嬉しかった。

が次の瞬間、見事に転んだ。二、三人一緒に転んだ。もちろんすぐ立ち上がって走つたけれど、ピリから

二番だった。退場後すりむいた膝を水道で流しながら、心も少しヒリヒリした。

左足を引きずりながら席に戻ると、「ええかつこするからや」と男子に言われた。私の心の中まで見通されたような気持ちになった。

「なんで分かったんだろう」

一瞬の心の隙を見破られたような気がしてどきりとした。

彼は野球部員だったが、陸上部の人より走るのが早かった。短距離では市内の記録を持っていた。彼の走っている姿は短い足なのに歩幅が広く、ぐんぐんと地を踏み回転していた。頭と腰の位置が一定で動かない。スピードに乗るつてこんな感じなんだ、と感じさせる走り方だった。風貌は中学生なのに、どう見ても「おっさん」風ではあったが、走っている姿はとても格好よかった。

そして。中学一年生から数えるともう四十年近く年月が流れた。

彼は今、大きな病と闘っているそうだ。

「病気なんか追いつかれないで、逃げ切つて」

同窓会の欠席はがきのコメントに、そうつぶやかずにはいられなかった。





「金閣寺」

柴小路秀磨

「うわあ、すげえ!」。いつものように子供達から歓声が上がります。

私は二年程前から、自分の趣味を生かし、京都散策のシルバーガイドをしている。五月六月の修学旅行シーズンには、毎日のように関東方面からの中学生を引き連れて市内の神社仏閣を巡り歩いている。オリエンテーリングの如くに見学地を駆け巡る生徒達の多くは、年寄りの堅苦しい説明よりも、参道で食事する生ハツ橋の味の方に心を奪われている。

彼らの巡るコースのベスト3は言うまでもなく、清水寺、金閣寺、銀閣寺であり、加えて北野天満宮、二条城、龍安寺であろうか。清水寺では舞台からの眺めに感動し、北野天満宮では必ず勸学札や守りを買いたい求め、龍安寺では真剣に石の数を数えてくれる。中でも一様に歓声を上げてくれるのは金閣寺である。「誰が建てたのですか」の問いにも「足利義満です!」と、すこぶる反応も良い。そして一斉にカメラを向ける。

人は単純に大きいものや美しいものには心を奪われる。とりわけ金閣寺では金箔を施した建物その黄金の輝きに感動し心を奪われるのである。他に金箔を施した建物として現存するものに、平泉の中尊寺「金色堂」がある。これは金閣寺よりも古く、平安時代に阿弥陀堂として建立されたものであるが、保存のため鎌倉時代以降は、一回り大きい覆堂におおわれてしまい金色堂そのものは外から見えなくなつてしま

つている。さらに昭和三十七年から六年かけて行われた金色堂の解体修理に伴い、覆堂の方も耐震、耐火、空調設備の備わった鉄筋コンクリートに改められて、修理を終えた金色堂はその新しい覆堂の中で往時の輝きを取り戻している。今、私達はこの金色堂を覆堂の中で、ガラス越しに眺めるようになっていた。永久保存のため止むを得ぬ手段かもしれないが、それは建物というより博物館の展示室で見る工芸品といった趣で、自然の中に立つ建造物としての風情は全くない。その点、金閣寺は「鏡湖池」という大きな池を前にして衣笠山の緑に包まれて、その姿を鏡のような池面に写し、まことに風情がある。金色堂も覆堂で覆われるまでは木立の中にその光り輝く姿を見せていた。木漏れ日に映えるこの堂の美しさはいかばかりであったかは想像に難くない。

「金閣寺」、正式には北山鹿苑寺舍利殿。室町幕府三代將軍足利義満の建立になり、同じく義満が建てた京都五山を代表する禪刹「相国寺」の塔たつちゆう頭の一つである。義満は卓越した政治力を持ち、富と権力の象徴として、この地に金色に光る楼閣を建てた。一人の学僧によつて火が放たれるまで五百年以上も燦然と輝き続けたのである。今の金閣が焼失後に再建されたものであることは、修学旅行生の多くがガイドブックで知っているが、国宝金閣が、この寺の若い学僧によつて放火されたという事実までは知らない。寺側の事情もあるだろうし、観光用のガイドブックにそこまでは記されていない。戦後、三島由紀夫の『金閣寺』を読んで育つた我々団塊世代を除き、今の若者は全く知らないと言えるだろう。昭和二十五年七月二日、国宝に指定されたばかりの金閣は「金閣の美しさに嫉妬」した鹿苑寺の学僧によつて放火され、またたくまに炎上した。その美しさに魅せられ、炎に包まれる金閣を一目見たいという欲望にかられた一学僧の手で焼き払われたのだ。この事件を題材にして三島由紀夫は、代表作となる『金閣寺』を書き上げた。それが

映画化されて金閣はかえって有名になったのである。父の遺言によつて金閣寺に入門した主人公は金閣の美にとりつかれ、やがて金閣とともに心中をはかるといふ筋書きである。「美に対する嫉妬」が青年を放火に走らせるわけであるが、それはあくまで作家の虚構の世界であり、作品一字一字には主人公と同様に作者三島にも共通する「美」への嫉妬や執着心が感じられる。現実における学僧の放火に至る動機としては、作品の中にも描かれてはいるが、当時の鹿苑寺住職への学僧の強い反感があつたものと推測されよう。当時から禅宗の寺でありながら、観光収入の多い金閣を支配しながらも、一方では禅僧としてのたてまえを言いつつ、その観光客の入場料で毎夜酒を飲みつつ説教する住職への反感がひきがねとなつたものと察せられる。昭和二十五年当初の年間八〇〇万円にのぼる収入を得る金閣が、中国禅僧たちが残した清貧一途の修行道を徒弟に課してきた矛盾。それは正に仏教界への警鐘ともとれよう……。

ともあれ金閣は昭和二十五年、一人の学僧によつて焼き払われた。皮肉にもこれが往時の輝きを取り戻すきっかけになつた。五年後、二千八百万円でまばゆく再建されたのが現在の金閣である。再建後この寺を訪れる観光客はどつと増えて「金閣ブーム」をつくり、それが京都観光ブームの口火となつた。今も修学旅行生は必ずこの寺にやつてきて行列をつくり、ビューポイントでは記念写真も撮るのもままならぬ状況で



ある。

今、金閣を訪れる観光客の大半は、その建物が金箔に覆われ光り輝いていることに価値を求めているが、昭和二十五年に焼失する前の金閣は永年の風雪に耐え、恐らく金箔も剥落し、今のようには決してきらびやかではなかったはずである。にもかかわらず、江戸時代よりすでに「金閣寺」と呼ばれ、多くの遊客でにぎわっていた。黄金の輝きはなくとも、歴史的な建造物として、他に比類なき程に美しく洗練された建物であったのだ。人はよく「侘・寂」の「銀閣」と比較するが、建築技術からすれば、金閣の方が数段優れていると私は思う。ずんぐりと重い感じのする二層の銀閣に比べ、一層目の上には屋根をふかず、全体を三層としてまとめ上げたバランスの良さや、屋根の反りの美しさからしても、やはりこの金閣に軍配を上げねばならぬだろう。

私は時々、古色蒼然たる昔の金閣の姿を思い描くことがある。そこには黄金の輝きこそないが、一級品のもののみがもつ凛とした輝きがある。昔を知るのは、「昭和の金閣」は本ものとしての価値はない、本ものの色つやがないと嘆くかもしれないが、確かに昔日の面影を求めることは無理かもしれない。しかし、庭のどの隅に立つても、木立の間、水の面に見え隠れする金閣は、庭全体をがっちり引きしめて美しい。

私は去年の冬、観光協会の企画する「京の冬の旅」で、金閣寺の本山に当たる「相国寺」の「承天閣美術館」のガイドを担当する機会に恵まれた。相国寺はその塔頭である金閣寺や銀閣寺に関連する宝物も沢山所蔵している。中でも私の目をひいたのは昭和二十五年に焼失したはずの金閣の屋根を飾っていた金箔の痕跡をとどめた鳳凰のオリジナルである。何故この鳳凰が焼失を免れてここに保存されていたのか？。実は明治の金閣解体修理に際し、傷みの目立ったオリジナルの鳳凰は保存すべく取りはずされていたのだ。つ

まり昭和二十五年金閣とともに焼失した鳳凰はレプリカであつたのだ。そう言えばあの平等院鳳凰堂の屋根を飾る一對の鳳凰もオリジナルは確か宝物館に展示してあつたように思う。金閣は焼失したが、鳳凰だけは昔日の姿をとどめることが出来たのである。

もう一つ私の目をひいたものもある。展示室前のロビーに据えられた金閣の模型である。明治の解体修理の際の設計図に基づき現在の金閣が再建されたわけだが、その時の余材を用い、当時の棟梁がこしらえた精密な模型であり、金箔も施されている。私は客が途絶えて暇ができると毎日、あきずにこの金閣を眺めていた。それは、あこがれの金閣を独り占めできる至福の一時であつた。見る角度によつて姿を変える金閣、それが長方形と正方形の巧みな組み合わせによるもの、だということ、この時改めて実感した。一層は南西部に葺戸しとみどを設けた寝殿造り、二層は簡素な書院造となり、共に長方形を成している。三曹は花頭窓を設けた仏殿造りで、正方形を成している。長方形の住宅の上に正方形の仏殿を置くという奇抜なアイデアを巧みに構成しまとめ上げて何の違和感もなく屹立する金閣は見る角度によつて表情を変える。鏡湖池越しに南西から眺める金閣はどっしりして実に安定感があり美しい。池の東北に回つて眺める金閣は空高くそびえ立つ。一層二層三層と、それぞれの時代を代表する異なつた建築様式で見事にまとめ上げられたこの希有なる建造物は義満の威光を今に伝え、以来多くの人々の心をとらえてきた。

あまりにメジャーであるが故に、若い頃から避け続けてきた金閣であるが、今のガイドを引き受けてからというもの、年に何十回となくこの金閣に足を運ぶようになった。その度に観光客の多さに煩わしさを感じてはいるが、金閣という建物のもつ美しさは一向に色あせず、逆に増々金閣という建物の魅力にとりつかれていく思いがしている。

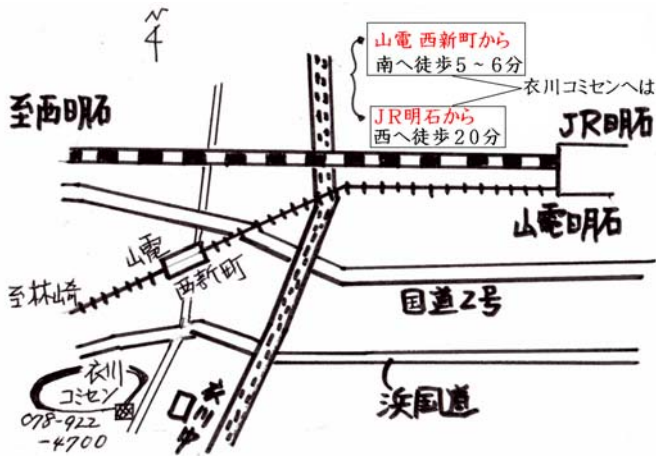
梅雨の晴れ間、珍しく観光客の途絶えた早朝の金閣に佇んだ。淡い日ざしを浴びた金閣はひときわ美しかった。ハスの葉を浮かべて静かに澄んだ鏡湖池。その水面に影を落とした金閣が、さざ波に揺れてはばたく。洛北の山に連なる広大な庭の濃い緑が金色の楼閣をいやが上にもひき立たせていた。光と影、金色と自然の緑、義満が描き出そうとした「現世の浄土」とは、その鮮やか対照の美を意味するのだろうか……。

ふと気がつく。と池の周りはあつと間に人の波、修学旅行生の歓声や警備員の声に交じって、英語、中国語、ハンゲル語も飛び交ういつもの賑わいがあった。池の縁に居並ぶ人々の前に輝くのはいつもの金閣である。その美しさを將軍は誇示し、悩める学僧は嫉妬し、京の人は愛した。昭和六十二年、新たに金箔で化粧直しをして、一層輝きを増した金閣は、今日も多くの人々を魅了してやまない。

京都観光に訪れた人の多くを手中に収め、あの垂れ目に微笑を浮かべ悦に入る法衣姿の義満がふと私の臉に浮かんだ。

了





◆例会は第2土曜日です。15時から 明石市立衣川コミセン

◆明石市立衣川コミセン(コミュニティセンター)

〒673-0025 明石市田町2丁目1-18

電話 / 078-922-4700

ファックス / 078-918-5965

以後も第2土曜日、15時からの予定です。出欠のご連絡は不要です。

◆四月から、明石市立衣川コミセン(上図・所在、連絡先)になりました。改めてご連絡しませんので、参加される場合はご注意ください。

※アクトスのHPは、  
<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

◆パソコン用HPに**掲示板**を作成しました。ご利用ください。

※アクトスは「行動する人」の意。

編集室から

次号(第12号)の原稿締め切りは9月末。

◆ 東日本大震災の義援金は、「文芸集団アクトス」として、1万5千円を、読売新聞社の「読売光と愛の事業団」に送りました。

◆ アクトス1号から10号は、国立国会図書館へ、2部送付しました。2日後に電話があり刊行頻度の問い合わせがありました。※アクトスの国会図書館所蔵情報として52ページに載せています。

◆ HPに、11号までを、一太郎ファイルで掲載しました。

(前ページにアドレス「URL」があります。検索の窓から「文藝□アクトス」といれて探されても出てきます。)

私はこの一太郎というワープロソフトでアクトスを作成しています。ワードというワープロソフトも最新版を持っています。ただ、一太郎はワード登場以前、1980年代から使用しています。ほぼ不自由なく使えます。ワードは英語表記から日本語に移されたために、縦書きなどでは、一太郎の方が使いやすいと言われていますが、マイナーになりました。(一太郎はジャストシステムという日本の会社の製品、ワードはマイクロソフトというアメリカの会社の製品)

ともあれ、以前、HPには、全世界でビジネスなどでも共通に使用されている、PDFというファイルの形式に一太郎ファイルを変換して掲載していました。

(前の通信に「拡張子」の話を書きましたが、ワープロだけで無く表計算、データベースなどのソフトにも

様々な種類があります。それぞれ作った会社が独自の仕様を組み込みましたので、そのソフトが無いと表示も編集も不可能です。そこで、どのようなソフトで作ったものも表示印刷でき編集もできるソフトが生まれました。それがアドビシステムという会社のPDFというファイルです。これに変換しますとファイルの容量も小さくなりますし、無料の閲覧ソフトを使うとどのような環境でも表示印刷できます。それで全世界で使われていますが、さすがに編集は基本的な機能だけでワードやエクセル、一太郎などのようには出来ません。)

さて、このPDFですが、あくまで、英語圏のもので、縦書きの日本語表示されているものを横スクロールさせるのは無理です。

そこで、一太郎ファイルのままHPに載せる事にしました。

これで、ほとんど冊子と同じ感覚で見ることが出来ます。

但し、一太郎というソフトが無いと表示できませんが、幸い、これを見たり印刷したり(編集は出来ない)する無料のソフトが提供されています。



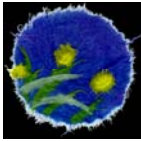
す。HPにはその入手先も表示してあります。

◆通信にも、小品ならば作品が掲載できます。また、連絡事項などもあります。お知らせください。検討いたします。

「亥一郎」

◆競演第9回◆

今回は、「タイ」とテーマを決めました。もちろん「たい」「体」「痛い」「鯛」「体育」などでもいいです。ワープロや電子辞書には便利な機能があつて、連想する語句、類語がすぐに出てきますから、こちらからヒントを得られても結構です。もちろん、飛躍されても、です。



◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
  - ②〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
- 〒673-0031 明石市宮の上1の17の614  
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一郎

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会 毎月第二土曜日

※午後 3時～5時

◆場所 明石市立衣川コミセン

〒673-0025

明石市田町2丁目1の18

電話 / 078-922-4700

ファックス / 078-918-5965

※明石市立衣川中学校から西へ一分

・山電西新町から南へ徒歩約5分

・JR明石駅から西へ徒歩約20分

・駐車場有

※この会場は、2ヶ月単位でしか申し込みできません。変更の場合もありますので、ご注意ください。特に初めて来られる方は編集室までご確認ください。

アクトス 第11号

平成二十三年八月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）500円